



第72回結核予防全国大会より

と き 令和3年3月2日

ところ リーガロイヤルホテル東京（東京都新宿区）

第72回結核予防全国大会がオンライン形式にて開催され、秋篠宮皇嗣妃殿下は、大会式典においてビデオメッセージでおことばを寄せられました。



本日、「第七十二回結核予防全国大会」が、「結核対策の今、感染症の新たな局面を迎えて」をテーマにオンラインで開催されます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の感染が拡大したため、静岡県で開催が予定されていた大会が中止になりました。本年の大会は京都府で実施することになっておりましたが、感染の状況をふまえ、オンラインで本部のある東京と各支部をつないでおこなう形で開催することになりました。大会に向けて準備をしてこられた皆さまとお会いできないことは残念でございますが、全国の皆さまとともに大会に参加できますことをありがたく思い、多くの関係者に感謝いたします。

本大会において、このたび、第二十三回ならびに第二十四回の「秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに、心からお祝いを申し上げます。皆さまが、長年にわたって結核対策に貢献してこられたことに對し、深く敬意を表します。

結核対策は、国の内外を問わず、人びとが健康に暮らしていくために、いまなお大変重要な課題です。

日本の結核罹患率は年々低下しているものの、最新の統計である二〇一九年でも、約一万四千人が新たに結核を発症しています。新規登録結核患者の六割以上は、六十五歳以上です。また、若年層の結核患者には外国出生者が多く、特に二十代では、新規登録結核患者の七割以上が該当します。世界に目を向けると、二〇一九年において約一千万人が新たに結核を発症し、約百四十万人が命を落としています。

このような状況を改善するため、国内の結核患者の発見や治療に力を入れることに加えて、罹患率が高い国や地域に對して日本の経験を活かした協力をおこなうことが求められております。

昨年は、世界結核肺疾患予防連合、通称「ユニオン」が創立百周年を迎えました。十月には「肺の健康世界会議」が「予防の促進」というテーマのもと、オンラインで開催され、世界各地の結核対策について様々な立場から活発な議論がおこなわれました。こうした機会を通じて結核についての理解が更に進み、世界の人々が結核をなくすために一層力を合わせることでありますように希望しております。

今回の新たな感染症の対策では、保健所をはじめとする地域に根づいたネットワークの活用や積極的疫学調査によるクラスター解析など、長年にわたる結核対策の経験が役立てられてきました。しかし、昨年从今年にかけての厳しい状況下で、通常の健診を受ける人が減り、結核患者の発見の遅れなども懸念されています。一方で、公衆衛生の重要性が幅広く人々に認識されることが、これからの結核対策の基盤を強める機会になることも考えられています。

現在の困難な状況の中、結核予防会をはじめ、医療・保健に携わる人々が、日々、結核対策に尽力していることは心強いことです。私たち皆で、結核を含む感染症に對して正しい知識を得て理解を深め、思いやりを持って適切な行動をとれますよう、心がけて参りたいと思います。

結核予防に関わる皆さまが、これからもご自身の健康に留意されながら、人々の健康を支えるために、大切な役割を果たしていかれることを期待し、式典に寄せる言葉といたします。

初めてのオンライン開催 第72回結核予防全国大会を顧みて 大会テーマ「結核対策の今～感染症の新たな局面を迎えて～」

結核予防会

事業部長 小林 典子

令和3年3月2日（火）、第72回結核予防全国大会をオンラインにて開催しました。いつもは全国から多くのお客様を迎え、華やいだ雰囲気の中でのスタートとなりますが、配信のための機器が並ぶ今年度の会場は人影も少なく、例年とは異なる緊張感に包まれていました。

緊急事態宣言中の開催であり、感染予防の観点から、講演・シンポジウムの座長・演者の皆様にはリモートでのご出演をお願いし、配信拠点となる会場リーガロイヤルホテル東京には、式典にご出演の東京都結核予防会理事長櫻山豊夫氏他、本部役員と大会事務局の事業部職員11名が参集しました。

総裁秋篠宮皇嗣妃殿下には、リモートにてご臨席をいただきました。

■全国支部長会議

1日に短縮したプログラムの最初は、「支部長会議」。新型コロナウイルスにより深刻な影響を受けた健診事業について、宮城県結核予防会齋藤基氏、長野県健康づくり事業団伊藤慶一氏、大阪府結核予防会木谷和男氏より現状をご発表いただき、座長の北海道結核予防会理事長館石宗隆氏のもと、今後の事業の展開について活発な議論が行われました。このようなシンポジウム形式は初めてであり、綿密なりハーサルを行って本番に備えていただきました。（詳細は本誌6頁）

■研鑽集会

午後からの前半は「新型コロナウイルス感染症と結核対策」をテーマに研鑽集会を行いました。基調講演は独立行政法人地域医療機能推進機構理事長の尾身茂氏。政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会長として多忙な尾身先生には、国会の合間を縫ってご出演いただきました。続くシンポジウムでは、新型コロナウイルス感染症の結核対策への影響について、保健所や医療現場、婦人会の立場からご報告いただきました。お忙しい中、座長と演者の皆様方には大変丁寧なご準備をいただき、今後の対策を進める上で大変貴重な知

見を得る機会となりました。（詳細は本誌7頁）

■大会式典

後半の大会式典は、結核予防会理事長工藤翔二の開会の辞で始まり、総裁秋篠宮皇嗣妃殿下より、ビデオにておことばをいただきました。例年、総裁より秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞者へ表彰状の授与をいただいておりますが、今年度は受賞者の功績を映像にて紹介いたしました。対象は、昨年中止となった第71回結核予防全国大会（静岡県）にて表彰を予定していた第23回受賞者8名と第24回受賞者5名、計13名の皆様です。複十字No.397に紹介記事を掲載しておりますので、併せてご覧ください。

田村憲久厚生労働大臣、結核予防婦人団体連絡協議会木下幸子会長からお寄せいただいた祝辞につきましては、当日、結核予防会専務理事羽入直方と代表理事石川信克が代読いたしました。また、日本医師会中川俊男会長からビデオによる祝辞をいただきました。

決議及び宣言文については、大会決議・宣言起草委員会をWebにて開催し、取りまとめた決議・宣言文案を東京都結核予防会櫻山理事長に読み上げていただきました。また、次期開催地を代表して、熊本県総合保健センター副理事長岩谷典学氏よりリモートにて、ご挨拶をいただきました。

■終わりに

今年度の全国大会は新型コロナウイルスの全国への感染拡大により、年度途中に会場を京都から東京へ移すことになりました。京都開催に向け、ご尽力いただきました京都予防医学センターの皆様の思いを引き継ぎ、感染状況を注視しながら幾度と変更を重ねてまいりました。当日は全国約140施設からお申し込みをいただき、通信等大きなトラブルもなく無事終了し、安堵しております。全国各支部および結核予防婦人会の他、多くの皆様のご理解とご協力により、第72回大会を開催できましたことを心より感謝申し上げ、報告いたします。🍵

厚生労働大臣祝辞

本日ここに、公益財団法人結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下の御臨席を賜り、第72回結核予防全国大会が開催されることを、心からお慶び申し上げます。

はじめに、本日、秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞された皆様に心からお祝い申し上げますとともに、皆様のこれまでの御尽力と御功績に対し、深く敬意を表します。また、本大会を主催されている結核予防会は、我が国で結核が国民病と恐れられていた昭和14年に設立され、これまで、我が国の結核対策と治療法に関する研究を推進するための中核的な役割を果たされてきました。その御貢献に対し、改めて厚く御礼申し上げます。

我が国は、結核予防会をはじめとした関係者の皆様の御尽力もあり、戦後の罹患率600を超えていた結核高まん延社会を脱し、罹患率11.5まで低下させることができました。しかしながら、令和元年には14,460人の新たな結核患者が発見されており罹患率の減少も鈍化傾向が見られています。結核が我が国で最も対策が必要な感染症の一つであることに変わりはありません。また、今般の新型コロナウイルス感染症による結核医療への影響についても、注視していく必要があると考えております。

近年我が国では結核患者の高齢化が進んでおり、新規結核患者の約4割が80歳以上の高齢者です。高齢の結核患者は症状が乏しいことが多いため、早期発見には各自治体で実施している定期健康診断を、新型コロナウイルス感染症の感染防止に留意しつつ、高齢の方々に利用しやすいものにするなどして受診率を高めることが大変重要となります。

また、外国生まれの結核患者は、前年から減少して1,541人となりましたが、全体の割合は前年と同じく1割を超えました。厚生労働省では、日本に入国する前に結核健診を受けていただく入国前スクリーニングの開始に向けて、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、関係省庁と調整をしております。また、入国後の日本滞在中に発病される患者も多数いるため、職場や学校、各自治体の実施している健診等の対策も重要であることに変わりはありません。

結核患者のさらなる減少に向けて、これまで以上に対策を講じる必要がありますので、今後も、格別の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、大会の開催に御尽力いただきました結核予防会をはじめとする関係者の皆様に、心から御礼申し上げますとともに、お集まりの皆様の御健勝と益々の御活躍を祈念して、私からの祝辞といたします。

令和3年3月2日

厚生労働大臣 田村憲久

(代読 結核予防会専務理事 羽入直方)

日本医師会長祝辞

本日、第72回結核予防全国大会が開催されるにあたり、日本医師会を代表してご挨拶申し上げます。

公益財団法人結核予防会におかれましては、昭和14年の設立以来、結核の制圧にご尽力されておりますことに、心よりお祝い申し上げます。

さて、結核は、明治時代から昭和20年代までの長い間「国民病」と言われ、恐れられていた時代がありました。しかし、医療機関や保健所の整備を始めとした公衆衛生の向上、結核予防法の制定など、わが国は、新たな結核対策等によって、死亡率の激減など世界に類のないスピードで結核患者数の減少を達成してきたところであり、結核予防会はその重要な役割を担ってこられました。

一方で、結核患者数は減少傾向にあるとはいえ、新規登録患者の多くを高齢者が占めているとの報告がなされており、職場等における集団感染もいまだに散見されます。

そのような中で、昨年は新型コロナウイルス感染症が猛威をふるいました。結核予防会は、長年結核という感染症への対応で培われた、接触者検診やクラスター分析、画像診断、人工呼吸器や呼吸管理等が、新型コロナウイルス対策における診断と治療に大きな力を発揮したと伺っております。

日本医師会は、国民に対する啓発活動等、地域の結核や新たな感染症への対策において、かかりつけ医の果たす役割が非常に大きいと考えており、その機能の充実・強化に努めてまいり所存であります。

結核予防全国大会は、今回で72回を迎えるわけですが、結核対策について共通の認識と理解を得ることは、誠に意義深いものと考えます。

関係者の皆様におかれましては、結核の制圧に向け、今後とも引き続き結核の制圧に向けご尽力賜りますようお願い申し上げます。

ここにあらためまして、本日、秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞の栄に浴されました方々に、心からの敬意を表し、お祝いを申し上げます。

また、本大会の開催にあたりご尽力いただきました、公益財団法人結核予防会をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、ご出席の皆様方の今後の益々のご活躍、ご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

令和3年3月2日

公益社団法人日本医師会会長 中川俊男

(ビデオレター形式)

全国結核予防婦人団体連絡協議会長祝辞

本日は、第72回結核予防全国大会が、新型コロナウイルス感染症対策を行い、オンラインという形で、開催されましたことを心よりお祝い申し上げます。

また、本日秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞された方々には、お祝い申し上げますとともに、今後とも結核予防のためにご尽力されますことをお願い申し上げます。

さて、令和元年の新登録結核患者数は14,460人に減少しており、年々改善されてきました。しかしながら、人口10万対罹患率は11.5ということで低まん延の指標10以下にまだ到達していません。

そこで、私たちは、これからも継続して結核の予防と制圧に向けて活動を継続して参ります。

今年度は、新しい生活様式に従い、八月からの「全国一斉キャンペーン」や九月の結核予防週間の前後に三密を避けつつ、結核予防への理解と協力を呼びかけました。複十字シール運動につきましては、知事表敬を可能な地域で実施し、コロナとともに感染症対策の必要性をお伝えし、シール運動の意義を各地で再認識することができました。

さらに、「国際協力」については、海外視察などが難しい時期ではありますが、カンボジア現地スタッフと連絡を取り、複十字シール募金が役に立っているかどうか情報を共有し、以前にもまして、国際協力活動の大切さを再認識しています。

婦人会一同は、心身ともに健やかな毎日を目指すため、女性の役割を再認識し、今後も全国的な複十字シール運動キャンペーンなどを通して、結核予防の普及に一層努力しますことをお誓い申し上げ、祝辞とさせていただきます。

令和3年3月2日

公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会会長 木下幸子

(代読 結核予防会代表理事 石川信克)

第72回結核予防全国大会決議

我が国の2019年における結核罹患率は人口10万対11.5まで低下し、22道県は既に10以下の低まん延状態になった。しかしながら65歳以上の高齢者の患者の割合が依然として高く、中でも90歳以上の超高齢者の患者が明らかに増加傾向にある。高まん延国から来日する外国出生者の結核患者は、全体の1割、20歳代においては7割を超えた。世界では、年間1,000万人の患者発生が推定され、2018年の国連高官会議で承認された政治宣言の到達目標に向けて、多分野の連携協力に基づく対策の推進が提唱され実施された。我が国でも入国前スクリーニング制度や医療機関等での言語障壁対応、更に生活状況に応じたきめ細かな対応により患者の早期発見と確実な治療完了のための活動が進められている。

このような中で起こった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、様々な社会活動や経済の停滞を招き人々の生活に甚大な影響を及ぼした。我が国の結核に関しては、受診抑制、健康診断の一時的な中止によって、少なくとも一時的に患者発見が滞ったと考えられ、感染拡大や診断の遅れにつながっていないか、状況の推移を注視する必要がある。また、結核病床が新型コロナウイルス感染症のために転用され多くの患者を救ったが、そのことは本来入院が必要な結核患者の医療に一定の影響を与えた。医療従事者や感染者に対しては、偏見や人権が脅かされる事態も発生している。世界のほとんどの国で、患者発見の抑制や治療継続の困難という問題が起こっており、この先5年間に結核による死者が20%増加する可能性が指摘されるなど対策の後退が懸念される。

以上から、本大会は、国及び地方公共団体、医療機関及び結核予防会、全国結核予防婦人団体連絡協議会等の関係団体が力を合わせ、次の4項目について努力することを決議する。

- 一、国内で新型コロナウイルス感染症がまん延する中においても、結核対策の重要性には変わりがないことを認識し、超高齢者・外国出生者などのハイリスクグループに対する早期発見や着実な治療完了を図るための対策を、国・地方公共団体・関係機関・国民が一体となって着実に進めること。
- 一、医療機関や保健所等において、新型コロナウイルス感染症のみならず、必要な結核対策の実施及び医療の提供が適切に行われるように、国・地方公共団体・保健所・医療機関・関係機関等は公衆衛生及び医療体制の整備を図ること。
- 一、新型コロナウイルス感染症の流行の中で、その被害を最小限にとどめるとともに、結核に関する国連高官会議における政治宣言の目標達成のため、日本の結核対策の経験や革新的な技術開発を通して、一層の国際協力を推進すること。
- 一、世界的に市民社会の役割が重視されていることを踏まえ、全国結核予防婦人団体連絡協議会は、国内外の関係団体と連携して、政策決定者へ働きかけるとともに新型コロナウイルス感染症や結核を含めた感染症の予防と感染症に対する偏見をなくすために、市民に対する正しい知識の普及・啓発を推進し複十字シール運動を活性化すること。

令和3年3月2日
第72回結核予防全国大会

第72回結核予防全国大会宣言文

新型コロナウイルス感染症の世界的流行の中にあって、結核を含めた感染症対策の重要性を全ての国民と世界の人々が共有し、患者中心の予防と医療及びそのための体制づくり、更に感染症に対する偏見や差別をなくすための活動を推進する。

国連の持続可能な発展目標及び世界保健機関が進める結核終息戦略の目標の達成のために、日本が高まん延期を克服した経験と日本で開発された革新的技術を活かし、感染症対策に関わる国内外の関係機関と連携しながら、結核対策活動を更に推進する。

以上、宣言する。

令和3年3月2日
第72回結核予防全国大会

第72回結核予防会全国大会 支部長会議報告

総合健診推進センター

統括事業部長 日黒 秀二

この度の支部長会議は、「コロナ禍における健診事業の現状と課題」をテーマに北海道支部館石理事長を座長として、宮城県支部齋藤事務局長、長野県支部伊藤事務局長及び大阪府支部木谷事務局長をシンポジストとして招き、討論が行われた。冒頭、北海道の新型コロナウイルスの蔓延状況と各支部の緊急事態宣言から現在に至るまでの報告があり、その後に3つの討論テーマによりシンポジウムが開始された。

討論1. 健診実施時の感染対策

巡回健診や施設健診において、不特定多数の受診者を対象とすることから、各支部とも“三密”を避けるべく様々な対策を施していた。特に大阪府支部からは受診枠の削減に始まり、受診者のマスク着用と手指消毒の徹底、面談時間の短縮など現時点でできる予防対策が励行され、今後に向けての課題が明確に整理され検討されていた。また、宮城県支部、長野県支部も巡回健診の場においても施設健診同等の予防対策を実施していた。これらの対策は、令和2年5月1日に健診8団体連名で発信した「健康診断実施時における新型コロナウイルス感染症対策について」（令和2年5月14日改訂）を忠実に遵守していることが確認できた。

討論2. 収益確保策、挽回策、経費削減策など

長野県支部は「今ある財産を有効に使い全ての効率を高める」ことを大目標にして、今年度は早期に健診計画を変更したことにより、延期となった健診の97.5%を実施でき、受診者数に至っては全体の80%までに留めることができたとの報告であった。一方、大阪府支部は施設健診でのエキストラ開催や受診枠の拡大、健診事業以外にテナント事業や車両の配車を含めた投機の見直しなど積極的な挽回策を実施し収益確保に努めている。また、宮城県支部は新型コロナワクチン接種やPCR検査・抗原定量検査など新型コロナウイルス関連事業を積極的に推進し、現状の巡回健診の効率化及び効率的な人員配置を図っていた。本部事業部では昨年の7月に日本対がん協会・予防医学事業中央会・結核予防会の3団体並びに結核予防会事業協議会の4団体連名による、新型コロナウイルス感染症と

健診事業に関するアンケートを行ったが、全支部平均は前年同期比が巡回健診56.4%、施設健診76.4%まで落ち込み、今回の報告のとおり、各支部の厳しい財政状況を裏付ける結果となった。（複十字誌395号参照）

討論3. 今後の健診のあり方（見通し）

長期的スパンではなく、2～5年先の見通しについて討論された。宮城県支部は、新型コロナワクチンの接種が先月から開始されたが、今までの歴史から浸透するまで3～4年かかっている為、地道な感染予防対策をしながら健診事業の継続を図る必要があるとの見解であった。今後は健診に関するニーズはこれまで以上に多様化すると考え、健診の差別化戦略の検討やオプション検査の充実、老健施設への健診の拡大、IOTの活用などの対応策を検討している。長野県支部の健診の今後の見通しとして、集団健診から個別健診に需要は移行し、健診環境が大きく変化すると考えている。従って、厳しい環境にある巡回健診のメリット・デメリットを明確にして巡回健診に対応することが重要とのことであった。大阪府支部でも集団健診から個別健診に移行することは明らかであり、大阪府支部内3施設が同等レベルの医療サービスを提供することが重要と考えている。総合健診推進センターの位置する東京においても、新型コロナウイルスの影響等により、集団型健診から個別型健診に移行する顧客が顕著である。従って、施設健診の充実を図ることが急務であり、多様化するニーズへの対応や効率性を高めて収益の確保をすることの必要性を改めて認識した。なお、三密を避けるための予約の徹底は繁忙期の平準化、業務の効率化に効果的であり、コロナ禍による事業実施方法の工夫を事業効率の向上に活かす視点も重要であろう。今後、健診業界を取り巻く環境はますます厳しくなると考えられ、効率的・効果的な運営の推進が重要であるとする。今回のシンポジウムは、コロナ対応を含め各支部に共通する課題について、的確で鋭い認識と対応方針の提示があり、結核予防会本部・支部の経営の充実に極めて有意義であった。出演された座長及びシンポジストの方々に深く御礼を申し上げたい。🍷

オンライン研鑽集会「新型コロナウイルス感染症の流行の中での結核対策」

結核研究所

副所長 慶長 直人

第72回結核予防全国大会 研鑽集会は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対応した初の試みとして、オンラインで、2021年、令和3年3月2日に開催されました。2020年3月11日に世界保健機関によるCOVID-19に関するパンデミックの宣言が行われてちょうど1年が経過しましたが、この間、社会は常にこの新型感染症の脅威に晒され続け、公衆衛生、医療の現場における負担は著しく、結核を含むコロナ以外の疾病に罹患した者にとっても、その影響は極めて甚大でありました。

今回の研鑽集会の基調講演では、新型コロナウイルス感染症対策分科会長として、大変お忙しい中を、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）理事長の尾身茂先生に「COVID-19これまで、そしてこれから」と題して、普段の報道などでは十分に伝わってこないわが国の対策の核心部分について明解にご説明いただきました。座長は結核研究所加藤誠也所長が務めました。講演で特に強調されたことは、COVID-19では、感染を広げやすい起点と条件は限られていて、遡って早期にそこを集中的に抑えれば、二次感染者数を効果的に減らせるというわが国のクラスター対策の戦略的特徴と、今後、緊急事態宣言解除後、いかに感染再拡大の予兆を見つけ、大規模なリバウンドを防ぐかという点でありました。

シンポジウムでは、さらに「新型コロナウイルス感染症の結核対策への影響とその対応」というテーマで、4名の演者の方にご講演いただきました。

はじめに結核研究所臨床・疫学部副部長の内村和広先生からは、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、受診控えや健康診断の機会が減少したことによる発見の遅れが、昨年の結核登録者数減少の要因として危惧される現状を報告いただきました。

次に、東京都多摩立川保健所保健対策課長の渡部ゆう先生からは、東京のベッドタウンである多摩地区の保健所において、結核対策のご経験を踏まえてのCOVID-19対応と、感染症対策に必要な人材を迅速かつ的確に投入できる有事の体制作り、ITを取り入れ

た業務効率化など、現場の声をまとめていただきました。

さらに結核研究所企画主幹（兼）複十字病院結核センター長の吉山崇先生からは、結核病棟を有する病院医師の立場でのCOVID-19対策、アンケートの結果を通じて結核を含めての病床転用の問題、今後の感染症病床のあり方について言及いただきました。

最後に全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局の辻知子様からは、結核対策上、大きな役割を果たしてきた婦人会の立場から、このコロナ禍の中でも、各支部が積極的に社会活動を続けられた状況を報告いただきました。

この後、厚生労働省健康局結核感染症課長の江浪武志先生より総括をいただきます予定でしたが、この事態では業務がご多忙を極め、今回はご欠席となりました。

本シンポジウムを通じて、結核対策と新興感染症のまん延は、相互に密接な関係にあることを改めて思い知らされました。

わが国は、いわゆる「第3波」において大きな痛手を負いましたが、欧米と同様の事態には至らなかった理由のひとつとして、これまで地道に活動を続けてこられたわが国の感染症疫学を専門とする方々が比較的早期に効果的な対策を打ち出されたこと、それを受けて、結核など呼吸器感染症対策に経験をお持ちの保健所、診療所、病院等の医療従事者が第一線に立ち、献身的に感染拡大を抑えてこられたこと、また婦人会の皆様にご代表される一般の方々が地域ごとに感染抑止に努めてこられたことが大きく、そこには戦後、国民病であった結核を減らしてきた人々の知恵と経験が今も生きているように感じられました。

今回のことを教訓に、COVID-19へのリバウンド対策を十分にとって気を緩めず、平時の結核、感染症対策を強化しつつ有事に備えることができれば、仮に将来、再び未知の感染症に遭遇しても、よりよい対応ができるのではないかと希望を抱きつつ終了した研鑽集会でありました。🍷